兵庫県下のミヤマカラスアゲハについて[1)]

山　本　広　一

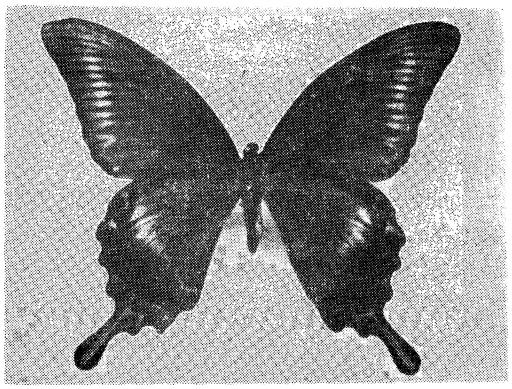
ミヤマカラスアゲハ（Papilio maackii tutanus FENTON, 1881）はカラスアゲハに似ているが，翅表の緑色鱗は一般に黄色みを帯び，本邦産アゲハ中もっとも華麗な蝶である。北海道から九州屋久島までの各地に見られ，伊豆七島・淡路・壱岐・対馬などには知られない。本州の中部山岳地帯や東北・北海道地方に多く，関東以西の地域では主として山地に産し，平地には珍しい。発生は年2回（九州南部では3回），夏型は春型に比べてはるかに大きく，後翅裏面にある黄白色帯は暖地に移るにしたがって消失する傾向にある。以下，兵庫県下の分布その他について詳記し，併せて私見を述べることとした。

1. 採集記録と分布の概況

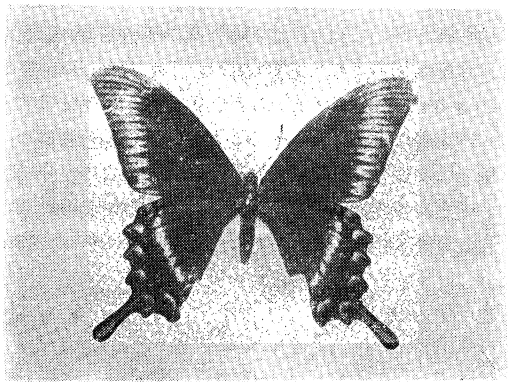
筆者がミヤマカラスアゲハを美方郡熊次村（現在の養父郡関宮町）[2)]に獲たのは1937年の夏である（1955, A）。当時この蝶は県下で採集された記録がなく，その名の示す深山（みやま）のものと思われていた。しかし，氷ノ山の山麓（600〜700m）や鉢伏高原（750m）には珍しくなく，大久保・福定・川原場・小路頃など，八木川上流の各地で見かけ，採集もした（第1図）。活動が機敏なので飛翔中は捕らえにくく，路上の湿りや庭の草花に来るのをねらったが，面白かったのは，朝露に濡れたナンキン畠での採集である。早朝のこととて蝶は動きが鈍く，花蜜を吸うのに余念がない。しかも花筒のなかに頭をいれているので，近寄っても気付かない。それに黄色い花に黒い翅がよく目立ち，つぎつぎと手づかみにしたものである。

1953年，筆者（1955, B）は養父郡西谷村（養父郡大屋町）へと出かけて行った。ここは氷ノ山の東尾根と播但境の山々に挟まれた大屋川沿いの谷あいである。蝶は筏をはじめ栗ノ下・佐治見（200 m）にもいるが，若杉・横行あたり（300m）には少なくない。横行は平家の隠れ家として知られた僻すうの地で，氷ノ山への登山路にあたる平家ノ城は筏から10km近くも離れている。中尾淳三氏(1960)によると，筏から杉ガ沢高原へ出る途中の“じいが墓”付近にも稀でないという。杉ガ沢は東尾根の関宮側に面しており，関宮付近にも産するものと思われる。筆者もまた，関宮村中瀬（関宮町）近くで獲たことがある。

ところで，横行ではこの蝶を“オコリチョウ”と呼び[3)]，



第1図　美方郡熊次村大久保産
夏型，♂（表面）；12—Ⅶ，1937
筆者採集・所蔵



第2図　養父郡西谷村筏産
春型，♂（表面）；8—Ⅴ，1957
中尾淳三氏採集・筆者所蔵

1）兵庫県蝶類誌（2）
2）採集当時の地名はほとんどが行政区画の変更で変っている。括弧内は現在の地名であり，参考までに併記した。
3）筏では“ションベンチョウ”（小便蝶の意）と呼ぶ者がある。真夏の日の下で湿地に群がって吸水する蝶は，たえず尾端から水液を漏らをらしている。これがあたかも放尿しているように見えるためだろう。サマチョウ”と言っている。容姿の優れたゆえと思うが，とにかくこうした特別の名を持つ蝶は珍しい。これも童たちにとって関心があるからにちがいない。

村人からは嫌われていた。それはあまりにも鮮やかな青藍色の鱗粉に毒気を覚えた村人が，かつてはこの地方にあったオコリ（マラリヤ病）の原因をなすものと思ったからである。

これより前，1947年筆者は城崎郡香住町で1♂を獲たことがあり（13—Ⅷ，1947），また，同郡長井村大谷（香住町）から奥佐津村三川権現へ出る間道でも目撃した。高橋匡氏からの教示によると，香住町小原（旧長井村）や三川地方ではカラスアゲハよりも多く，日本海沿岸には珍しくないとのことである。そして，お盆前には庭前あたりに見かけるという。

養父と美方の郡境にある妙見山（1,142m）に産することは，1957年大槻孝司氏によって記されている。同氏はその中腹名草神社の境内（760m）で採集した（10—Ⅷ，〔1956〕）と述べており，筆者もまた1964年，養父郡八鹿町日畑から登って妙見部落にいることを確めた。

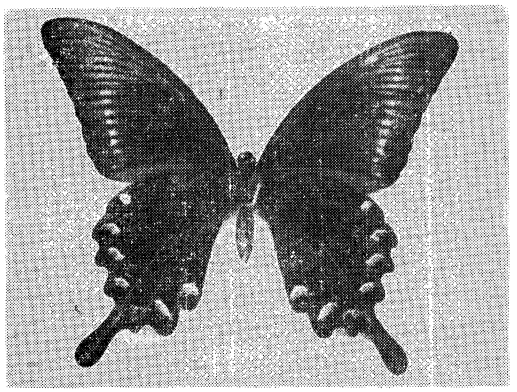
鳥取県境に聳える扇ノ山にも産する。この辺りは氷ノ山と同様，その蝶相には注目すべきものがあり，1950年頃より一部の愛蝶家によって採集が試みられていた。しかし，当時の記録はなく，本県側の本種については山本・吉阪（1958）によるものが最初のものと考える。その後，大槻典男氏は扇ノ山採集記（1960）に美方郡温泉町田中から菅原（300m）への途で水溜に群がったこの蝶を認め（26—Ⅶ，1959），山頂一帯に見かけた（27—Ⅶ，1959）と記している。辻啓介氏も1960年の採集行に3頭を目撃したと述べ（18～22—Ⅶ，1960），翌1961年同地で獲た春型の1♂（2—Ⅵ，1961）を筆者に贈られた。第5図はその裏面を示したものである。6月に入ってもなお完全な個体が獲られるのは，やはり発生が遅いためだろう。蝶は菅原よりさらに奥の軽便軌道や霧ヵ滝付近でも採集され，本谷付近には少なくないものと思われる。

但馬・播磨境にはいくつかの産地が知られている。

1948年，筆者は神崎郡長谷村栃原（朝来郡生野町栃原）と朝来郡山口村神子畑（同郡朝来町）の谷を探した。栃原へは1944年に1度行ったことがあり，千町峠への細路（旧路）も辿ったが，思わしい成果がなく，そのままとなっていた。ところが，1952年西村公夫氏は段ヵ峯山塊には普通な種であることを明らかにし，ついで寛芳彦氏も栃原谷に産する旨を記録した。

神子畑谷にはカラスアゲハの類が多く，神子畑川の堰堤や軌道近くの湿りに群っていることがある。この辺りの個体には，後翅裏面の白帯が消失し，カラスアゲハと紛らわしいものが少なくない（第3図）。

さて，段ヵ峯山塊とは，段ヵ峯（1,103m）を中心とした宍粟・神崎・朝来郡境の山域である。西村公夫氏からの私信では，砥ノ峯山麓の川上（神崎郡大河内町川上；500m）で一挙に2♂，1♀を採集した（24—Ⅴ，1954）と言い，吉阪道雄氏からは峯山（大河内町上小田；900m）頂上付近にもいると聞いている。



第3図　朝来郡山口村神子畑産
夏型，♂（裏面）；11—Ⅷ，1952
筆者採集・所蔵

1955年，松井俊公氏は宍粟郡奥谷村引原（同郡波賀町）で1頭を目撃したと報告した。そして，同地方にはすでにその発生が筆者によって確認されていた旨を述べている。ところで，筆者が初めて奥谷を訪れたのは1940年の頃であったと思う。それは引原ダムが造られる以前であり，筆者が歩いた辺りの一部は音水湖の底深くかくれている。当時はいつも西谷村上野（波賀町）から木材運搬用の軌道に沿って引原川を遡って行ったが，この蝶を見かけたのは原（300m）あたりからである。赤西谷はもちろん，日ノ原・引原でも獲たが，音水には稀でない。最近同地を訪れた猪股涼一氏は“音水ではカラスアゲハよりも多い”と語っており，さらに北上した道谷や戸倉辺には少なくないものと推察する。

播・但・丹の三国に跨がった三国岳（855m）や多可・神崎郡境の千ヵ峯（1,006m）・笠形山（939m）にもいる。猪股・岡本両氏の記録によると，千ヵ峯の中腹で宮崎敬裕氏が多数の個体を目撃し，そのうちの1♂を採集した（14—Ⅴ，1961）ことがあり，笠形山には小西池英身氏による春型の1♂（7—Ⅵ，1959）と林成光氏採集の1♂（3—Ⅴ，1960）がある。また，西脇自然同好会昆虫班は（26—Ⅵ，1960）（23—Ⅷ，1960）に獲たと報じている。笠形山には山頂に蝶道があり，蝶は気流に乗って上がってくるらしい。

1953年，筆者は飾磨郡雪彦山麓（250m）で2頭を目撃し（17—Ⅴ，1953），同地に産することを報告した。その後，岩村巌・中谷貴寿両氏は同地に少なくないと言い，岩村氏は5月中旬に1♂を採集し，1頭を目撃したと述べている。また，1964年の姫路市内学童理科作品展には福井一樹君（城南小）が採集した1♀（20—Ⅷ，1961）があったし，筆者も最近春型の1♂，1♀を獲た

(12—V，1966)。

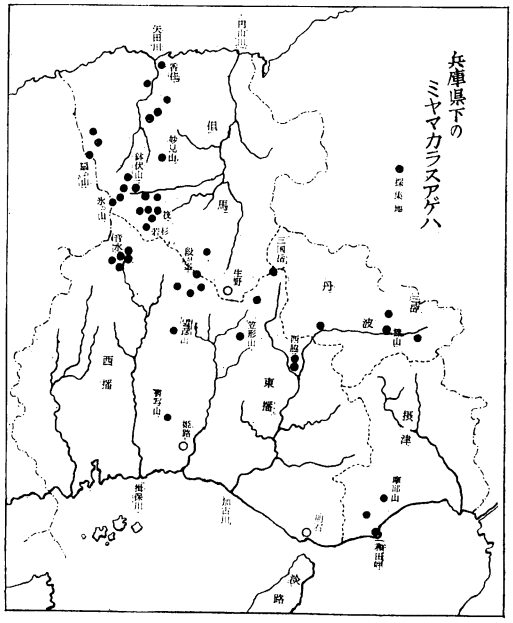
姫路市近郊には書写山（363m）に産する。岩村・中谷両氏（1961）によると，岩村氏はこの山頂で1♀を目撃した（12—Ⅷ，1958）ことがあり，1959年の姫路市〔学童作品〕展に山陽中学生の出品した1♀（6—Ⅷ，1959）があったとのことである。

ところが，最近西脇市内からも2頭が見つかった。猪股涼一氏が西脇市坂本の西林寺境内でクサギの花に来ていた1♀を獲た（18—Ⅷ，1958）のと，岡本清氏が西脇市役所付近の街路上で吸水中の1♂を手づかみにした（16—Ⅷ，1960）のとである。この付近には350m前後の山がないでもないが，多くは200m程度の山なみであり，このような拓けた100m級の低地に獲られたことは珍しい。

丹波地方には多紀郡篠山町や同郡城東町日置に産地が知られている。そして1960年には鈴木清明氏らによって三岳（793m）と盃ガ岳（496m）の発生地が追加され，さらに1965年，河津康宣氏らによって氷上郡山南町谷川の石がん寺から見つかった（7—Ⅵ，1964）。このように丹波高原での記録は少ないが，1952年，山本雅昭氏が氷上郡神楽村（青垣町）には発見される可能性があると言ったように，今後は新たな産地がいくつか見つかるものと考える。

摂津地方には谷口和義氏による“那須のり子女史が摩耶山頂で採集されたる由”との記録があり，高橋寿郎氏は兵庫区烏原で採集したと語っている。筆者もまた1930年の頃，布引滝の下手で確かにそれと思われる春型を目撃したことがある[4]。しかし，何れもが1938年，神戸市の裏山に起こった大出水以前のことであり，地形も変わり，詳しいデーターがないために疑問があった。そのため，加地早苗氏（1940）は“……，事実であれば相当稀な種類である”と言っている。ところが，その後，吉阪道雄氏は摩耶山頂で目撃した（8—Ⅵ，1956）と述べ（山本・吉阪：1958），人見勝氏も，また和田岬神戸検疫所宿舎の庭で産卵中の2♀を採集し（11—Ⅸ，1963；29—Ⅸ，1963），他にそれと思われる1♀を目撃した（12—Ⅸ，1963）と報じている（1964）。しかも，当時の卵は幼虫となり，翌春4月にF_2が羽化しているのをみると，この地域でも成育できるわけである。折から高橋寿郎氏によって再び烏原貯水池付近で1♀が採集される（19—Ⅸ，1965）[5]など，このところ神戸市内にはいくつかの例が知られている。そのため，蝶は余脈を裏山のどこかに保たれているのでないかと思えないことはない。しかし，和歌山辺りから迷い込むことも考えられるので，散発的に発見される本種については，さらに今後のようすを見まもる要がある。

以上の資料によって作成したのが別表の分布概念図である。これによると，ミヤマカラスアゲハは県の中央背梁山脈地帯に多く，これを中心として，北は城崎郡香住町香住のような日本海岸にまで，そして南は姫路市書写山を南限とする標高100m前後の低地にまで広がっている。ところで問題なのは神戸市の場合である。現在までに知られた個体が少ないため，偶産種であろうとの見方もあるが，背後には1,000m近い六甲山塊があり，定着の可能性がないとはいわれない。また，あまりにも内海近く産することに奇異な思いもするが，こうした例はさらに暖地の鹿児島南部や屋久島にも見られ，食樹の分布との間に大きな関係があるものと考える。



2. 生活史瞥見

(1) 食樹について

幼虫の食樹として，キハダ・ヒロハノキハダ・ハマセンダン・カラスザンショウのミカン科植物が知られている。

キハダは但馬地方に多く，室井綽氏の教示によると，朝来郡生野町黒川；同郡朝来町老波，平野，佐中；養父郡関宮町妙見；飾磨郡夢前町雪彦山；宍粟郡波賀町奥谷

4）この付近は，その後の都市造りに様相を一変したが，渓流に架けた橋には往時の姿が残っている。筆者はこの崖際にあって流れに沿って上下するアゲハを狙ったものである。ミヤマカラスアゲハとおぼしい特別華麗な個体を目撃したのもこの所であったが，崖上からは翅の裏面が見えなく，疑問のままに発表はしなかった。

5）高橋氏によって近く発表される筈（目下寄稿中）である。

などに採集された記録があり，播但境の深山地から播磨中部にかけて本種の多いのもそのためと思われる。また，高橋匡氏によると，日本海岸近くカラスザンショウが多いとのこと。神戸市付近では須磨区鉢伏山や六甲山にカラスザンショウが見つかっている。人見氏が神戸市和田岬での観察では，蝶は宿舎の庭に植えられたキハダ・カラスザンショウ・イヌザンショウのどれにも産卵したが，キハダの周辺を飛びまわることが最も多かった由である。キハダはこの蝶が好むところに違いない。しかし，吉阪道雄氏は，かって甚田竜太郎氏が多紀郡篠山での観察結果からカラスザンショウでも成育すると述べており，日本海沿岸や瀬戸内側の低山地ではカラスザンショウなどによって成育しているのでないかと受けとれる。

(2) 発生について

雪彦山麓（250*m*）のような低山地では，5月初旬に春型が現われる。それはカラスアゲハの発生よりもいくらか早く，筆者が同地で観察した1966年5月10～14日には，カラスアゲハのほとんどが無傷の新しいものであったのに，本種では♀もすでにこわれていた。しかも，その傷みは大きなものである。しかし，但馬あたりの深山地では5月下旬～6月上旬に完全な個体が獲られている。

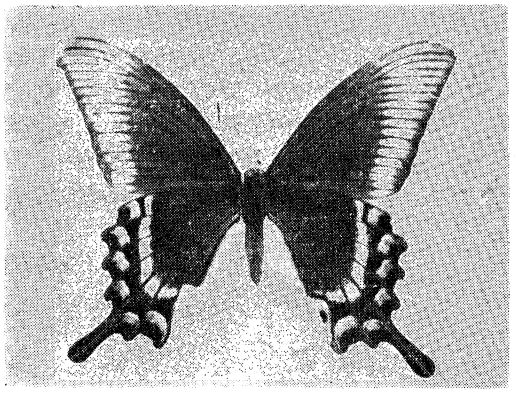
夏型は7月下旬～8月に多く，ときには9月半ば以降にも見かけることがある。そのため，岩村・中谷両氏（1962）は発生が年3回にわたるのでないかとも言っている。人見勝氏からの教示では，前記1963年の9月に採集した♀から得た卵が翌春4月10日に羽化して F_2 となり，ついで F_3 が6月10日に，F_4 が7月24日前後に成虫となっている。もっともこれは，飼育によるものであり，F_2 の出現が野外での場合に比べて約3週間も早く，その後の世代が順調に運んでの F_4 と考えられないことはない。したがって，直ちに年3回の発生をするとは肯定できないが，高橋氏が獲た神戸市烏原産が19—Ⅸ，1965でありながら完全な個体であったことを考えると，あるいは気温の暖かい内海側では，発生が3回におよぶことがあるのではないかとも思われる。

一般に春型の採集例は少ないようである。それは出現期間の短いためでもあろうが，個体数の少ないためではないかとも考える。今までに雪彦山麓で採集された夏型は珍しくないが，春型は目撃例を含めて約10頭程度であり，1966年，筆者がこの地で払った3日間の努力に対しても，酬いられたのは1♂，1♀の2頭にしかすぎなかった。

3. 翅の斑紋変異その他

本県産についての異帯型は知られない。

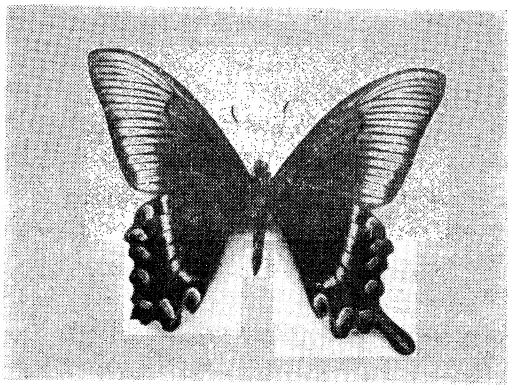
夏型のなかには裏面の白色帯がカラスアゲハに似て，紛らわしいのがないでもないが，春型では識別が容易である。しかし，その特長となる後翅裏面の黄白色帯も第4図のように，つねに太く鮮明であるとは限らない。はなはだ細くなったもの（第5図）もあれば，半ば消えたのもある（第6図）。しかし，全く消失した個体（masuokai KATO, 1937）は見当らない。一般に黄白色帯の鮮明な個体は，前翅表面の青藍色帯が美しく，前翅表面の外縁に沿った緑色帯も一そう鮮かな黄色を帯びている。



第4図　養父郡西谷村筏産
春型，♂（第2図の裏面）

夏型では後翅裏面の黄白色帯が消えやすく，完全に明瞭なものもあるが，全く認められないのもある（第3図）

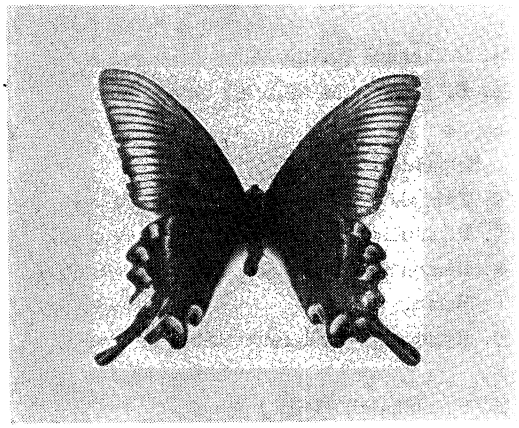
ここに貴重な標本を贈られた中尾淳三・辻啓介の両氏に対し，また，ご懇切なご教示を賜わった人見勝・室井綽・西村公夫・高橋寿郎・高橋匡各位に深く感謝の意を表して，この項をとじることとする。



第5図　美方郡扇ノ山産
春型，♂（裏面）；2—Ⅵ，1961
辻啓介氏採集・筆者所蔵

（以下p. 220へ）

（以下 p. 251より）



第6図　飾磨郡夢前町坂根産
春型，♂（裏面）；12—V，1966
筆者採集・所蔵

文　献

人見　勝（1964），神戸市のミヤマカラスアゲハ，蝶と蛾15（1）：26

猪股涼一・岡本　清（1960），多可・西脇地方の昆虫（蝶類），兵庫生物4（1）：24—28，23

————・————（1962），多可・西脇地方の蝶類（追報），兵庫生物4（3／4）：177—178

岩村　巌・中谷貴寿（1961），西播の蝶分布資料（1），兵庫生物4（2）：135—136

————・————（1962），同上（2），兵庫生物 4（3／4）：174，173

加地早苗（1940），最近の六甲連山の蝶類目録，昆虫界8（77）：442—452

寛　芳彦（1953），兵庫県生野栃原谷方面〔採集案内〕，Amateur Entomology 4（2）：22—24

河津康宣・太矢信昭（1965），石がん寺採集記，Natura（22）：53—56

松井俊公（1955），兵庫県宍粟郡の蝶類，兵庫生物3（1／2）：33—35

中尾淳三（1960），氷ノ山とその付近の蝶類，Viola（養父郡西谷地区昆虫採集同好会）（6）：1—15

西村公夫（1952），段ケ峯山塊の昆虫類に就いて，Trans. Chugoku Ent. Soc. 2（2）：39—44

西脇自然同好会昆虫班（1965），西脇・多可・八千代昆虫目録，会報1（1）：46—58

大槻典男（1960），扇ノ山採集記，Natura（17）：29—33

大槻孝司（1957），氷の山採集記，Natnra（14）：38—41

谷口和義（1938），神戸産蝶類雑記（1），昆虫界6（55）：761—762

辻　啓介（1960），扇ノ山の蝶相，兵庫農科大学生物研究部部誌（1）：13—16

鈴木清明・畑中熙・辻　啓介（1960），多紀郡蝶類目録，同上（1）：37—43

山本広一（1954），播磨雪彦山の蝶，兵庫生物2（4／5）：226—227，215

————（1955A），兵庫県氷ノ山夏の蝶，虫同友会研究報告（1）：49—54

————（1955B），但馬西谷村にミヤマカラスアゲハを探ねて，MDK News（38／39）：51—53

————・吉阪道雄（1958），兵庫県産蝶類目録（1），兵庫生物3（4）：228—236

山本雅俊（1952），氷上郡の蝶相について，Natura（8）：7—12

吉阪道雄（1958），ミヤマカラスアゲハの食樹カラスサンショウについて，新昆虫　11（5）：50